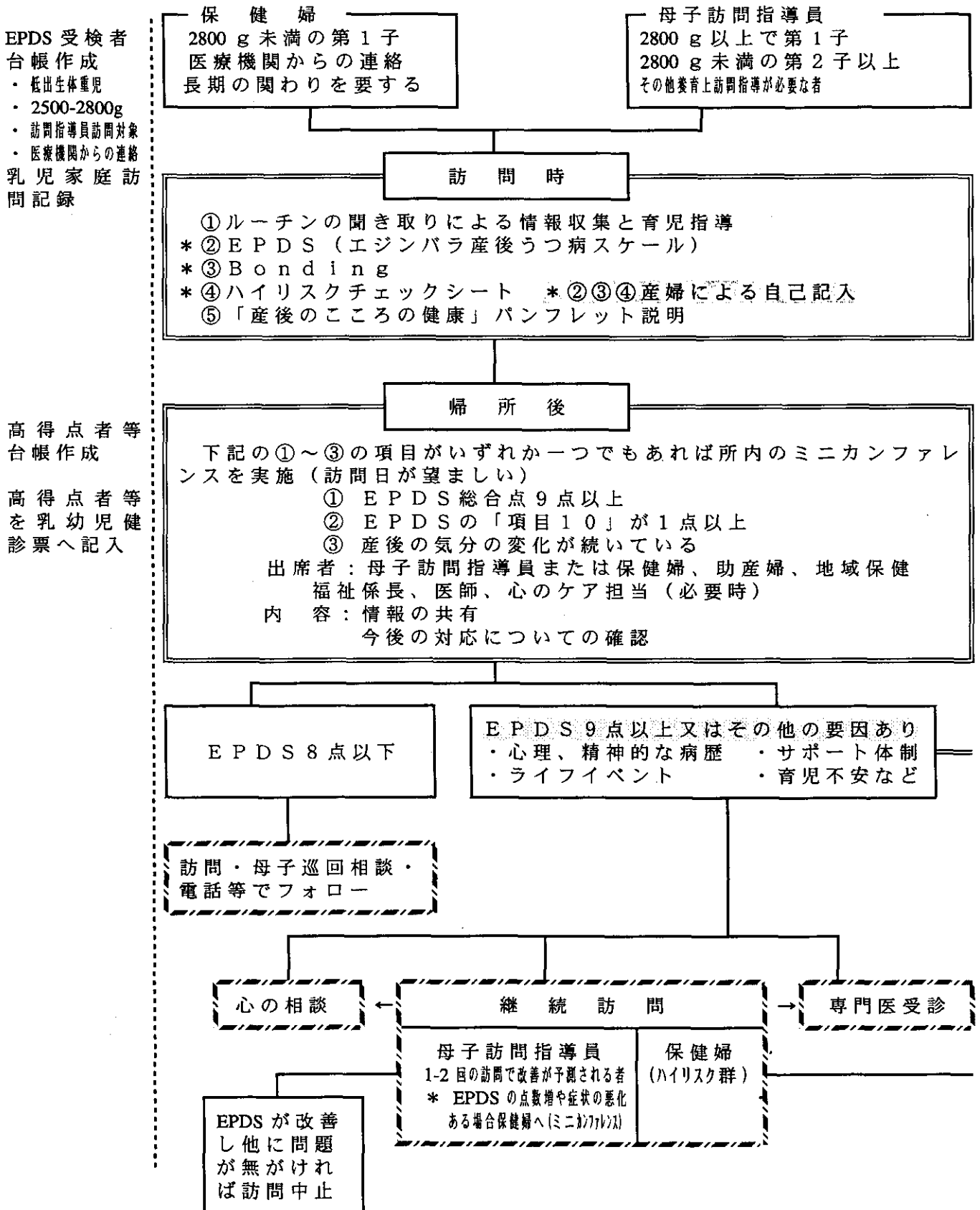


# EPDSを基準とした 家庭訪問フォローアップ・フローチャート

平成13年4月



1. 保健婦が実施する家庭訪問の対象

- 母親：  
 ・高年（40代）初産婦  
 ・若年（10代）産婦  
 ・精神疾患、アルコール依存症、薬物中毒が判明している  
 ・医療機関からの依頼  
 ・その他

- 子ども：  
 ・保護者より届出のあった出生時体重2800g未満  
 ・医療機関からの依頼  
 ・乳児健診等で問題あり  
 ・小児慢性特定疾患等の申請時に依頼  
 ・その他

2. 母子訪問指導員の訪問後、保健婦が引継を受ける対象例

- 母親：  
 ・望まぬ妊娠  
 ・妊娠歴（人工妊娠中絶、体外受精など）  
 ・妊婦健診に受診回数が少ない  
 ・心理的、精神的治療歴  
 ・アルコール、薬物中毒  
 ・援助を要する身体疾患  
 ・経済的な問題  
 ・夫婦の不和  
 ・育児不安が強い  
 ・育児知識や理解力が乏しい  
 ・育児姿勢に問題あり  
 ・虐待歴、被虐待歴  
 ・病人介護等の負担が大きい 等

- 子ども：  
 ・多胎  
 ・先天異常  
 ・発育障害  
 ・出生後、家庭外で養育  
 ・不潔  
 ・被虐待歴 等

3. 「こころの相談」

目的：産後うつ病などが疑われ、専門機関の治療にのせた方がいいのか、このままサポートしてよいのかを見極める場とする。

対象の把握：保健婦・母子訪問指導員の家庭訪問、乳幼児健診、電話相談、その他の地域活動等

\* 乳健時、把握したケースは「こころの相談申し送り票」に記載し担当保健婦へ

方法：相談ケースの概要、相談内容などを所定の用紙（別紙）に記入し心のケア担当者へ

①産婦自身が面接（校区担当保健婦が同席） ②産婦が拒否したら訪問者が面接

4 か月児健診

母親：気分の状況、食欲、睡眠、疲れ、家族の協力、サポートの有無について聞く  
 \* これまでの育児を労うなどの言葉かけをする。  
 担当保健婦へ状況を伝える

継続訪問（保健婦）

母子巡回相談

心の相談・  
 心理相談員による相談

4 か月児健診  
 カンファレンス  
 台帳  
 記載

\* 継続訪問の基準 1回/月以上

\* EPDS点数の変化の把握

・2回目は1ヶ月以内に実施その後は3ヶ月以内毎に実施する。

（良くても悪くても変化があると感じた時には実施）

・中止の目安 ①EPDS 8点以下

②Bonding改善

## 4 岩手県久慈保健所

### 平成 12 年度健康づくり・栄養改善事業事例

実施主体	岩手県久慈保健所	事業分類	①調査・研究 ②健康教育・栄養指導 3 マンパワー育成 ④ネットワーク構築 5 その他
事業名	子どもの食環境づくり事業		
事業実施の背景 (ニーズ)	管内の3歳児のう歯状況はいまだ全国値と10年以上の遅れをとっている。また肥満度20%以上の児は3歳児の約3%から小学校では9.8%と跳ね上がり、全国値の3.5倍にもなっている。さらに当所実施の調査で、母親の食生活習慣が、子どもに大きく影響していることがわかった。		
目 標	「自分で健康・栄養管理ができ、心身ともに健康な大人に成長する」を目標に、①関係機関との連携②地域ボランティアとの連携③住民への普及・啓発④環境づくり の大きく4つに分けて事業を展開した。		
事業内容	〔実施期間〕 平成9年度～11年度 (1単年度事業 ②継続事業)		
	〔対象者〕 保育園、学校、市町村、食生活改善推進員協議会、一般住民 〔実施状況〕 継続事業は、経年的な経過も記入すること。 平成9年度 ・子どもの食環境づくり研修会(種市町・山形村) ・平成8年度管内市町村3歳児健診アンケート調査分析 ・保育所給食担当者研修会 ・「お茶っけでえ」運開始(山形村食生活改善推進員協議会と共同) 平成10年度 ・子どもの食環境づくり研修会(種市町・山形村) ・ヤングママと元気久慈っ子食生活応援大作戦事業(食生活改善推進員協議会久慈支部) 旬の味ごよみポスター全戸配付 手作りおやつ集作成・3歳児健診時に手作りおやつと一緒に配付 おふくろの味伝承料理教室、子ども栄養教室 ・保育園年長児食習慣アンケート調査実施 ・子どもの食生活環境づくり検討会開催(医師会・歯科医師会・学校保健会・食改・保育園) ・平成10年度管内市町村3歳児健診歯と食生活アンケート調査実施 ・子どもの食生活環境づくり検討会開催(参加者:管内小学校・保育園・幼稚園・市町村) ・「食べることで生きる基本」リーフレット作成・配付(管内保育園・幼稚園等全家庭) ・生徒・保護者への健康教育(久慈小学校・種市幼稚園・長内保育園) ・「お茶っけでえ」ポスター増刷、管内公共施設配付		
事業評価	〔得られた効果〕 各種調査から、3歳児健診時と就学前のう歯状況、肥満度を比較してかなり悪化していることがわかった。この時期は施設での身体計測や健康診断のみであり、行政による働きかけも不足していることから、さらに連携を強化し、具体的な指導目標を掲げた啓発普及や指導機会を充実させていこうと、共通の認識が得られた。う歯・肥満状況の改善には至っていない。		
	〔課題〕 健康・栄養管理が実践しやすい環境づくりについては十分な取り組みがなされなかった。来客時のもてなしや孫かたり(子守り)等における糖分摂取習慣の改善等、地域の慣習を見直すための具体的な事業展開が必要である。		
今後の方向性	行政・保育施設・学校等関係機関との連携システムを確立させること、地域全体で問題を認識し改善に取り組む仕掛け作りをしていくことが保健所の役割と考える。		
担当者等	所属・課等 岩手県久慈保健所 職 栄養士 氏名 岩山啓子 住所〒028-8042 久慈市八日町1-1 電話 0194-53-4987 ファックス 0194-52-3919		

## 5 岩手県遠野市

### 平成 12 年度健康づくり・栄養改善事業事例

実施主体	遠 野 市	事業分類	1 調査・研究 3 マンパワー育成	2 健康教育・栄養指導 4 ネットワーク構築	5 その他
事業名	高校生健康生活定着事業				
事業実施の背景(ニーズ)	市内高校生対象の貧血予防教室「フレッシュサークル」は昭和 58 年度から遠野保健所が主体となって開催していたが、地域保健法の改正に伴い市に移譲。平成 11 年度から市が主催となり、保健所、学校、食生活改善推進協議会の共催で実施している。貧血予防健診有所見者だけを対象としたものから、全校生徒も対象の健康づくり事業に展開している。				
目 標	第 3 次国民健康づくり運動「健康日本 21」における栄養・食生活改善の目標を達成できる個人「自分の食生活は自分で管理できる。」を育成する。				
事業内容	〔実施期間〕 平成 11 年度～12 年度 (1 単年度事業 2 継続事業)				
	〔対象者〕 市内高等学校に在学中の高校生				
	〔実施状況・結果〕				
	事業名	ア 健康づくり講演会	イ 生活行動調査	ウ 食生活改善講習会「フレッシュサークル」	
	開催日	12 年 10 月 10 日 13:30～15:00	12 年 10 月下旬～ 11 月上旬	12 年 11 月 6 日 9:00～13:00	12 年 11 月 16 日 9:00～13:00
対象者	T 高等学校 高校生・教職員 800 名	貧血予防健診 有所見者 T 高校 40 名 R 高校 19 名	R 高等学校 全学年 19 人	T 高等学校 2 学年 21 人 父兄 1 名	T 高等学校 1 学年 19 人 父兄 1 人
会 場	T 高等学校第一体育館		R 高等学校 家庭科実習室	遠野健康福祉の里 栄養指導室及び調理実習室	
内 容	講演 「命を短くする食事」 岩手県予防医学協会 専務理事 小山田 恵	・ 健診有所見者を対象に、食習慣、食事内容と生活時間調査を実施。 ・ 自分の食行動や生活の実態がわかる。	講話「生活改善について」「食生活について」 講師 市保健婦・県栄養士 調理実習「貧血を予防するバランス献立」 講師 市栄養士	・ 講話の内容から自分の生活行動の問題に気づく。 ・ 食と栄養についての知識を得る。 ・ おいしく手軽な貧血予防食・克服料理を覚える	
従事者	T 高校厚生課 市保健福祉課	高校養護教諭 市栄養士	学校養護教諭 市保健婦 県栄養士 市栄養士、在宅栄養士、食生活改善推進員		
事業評価	〔得られた効果〕				
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 講演会終了後は、感想文をもとに健康教育ができ、生徒の健康づくりの意識啓発になった。</li> <li>・ 対象者に、個々の問題を解決するための糸口を提起できた。</li> <li>・ 高校生の健康づくりを支える関係機関の連携ができた。(学校、PTA、県、食生活改善推進協議会、市)</li> </ul>				
今後の方向性	〔課題〕				
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 数値による評価は、1 年後の定期健診時に確認できるが、生活習慣が定着されたとと思われる時期(半年後)に検査ができる体制が必要。</li> <li>・ 授業の一環として実施しているので、保健関係者だけでなく教育関係者(家庭科教諭)との連携が必要。</li> </ul>				
担当等	所属・課等 民生部保健福祉課 職 主任栄養士 氏名 北湯口美和子 住所 遠野市松崎町白岩字薬研淵 4-1 電 話 0198-62-5111 FAX 0198-62-1599				

## 6 東京都小平保健所

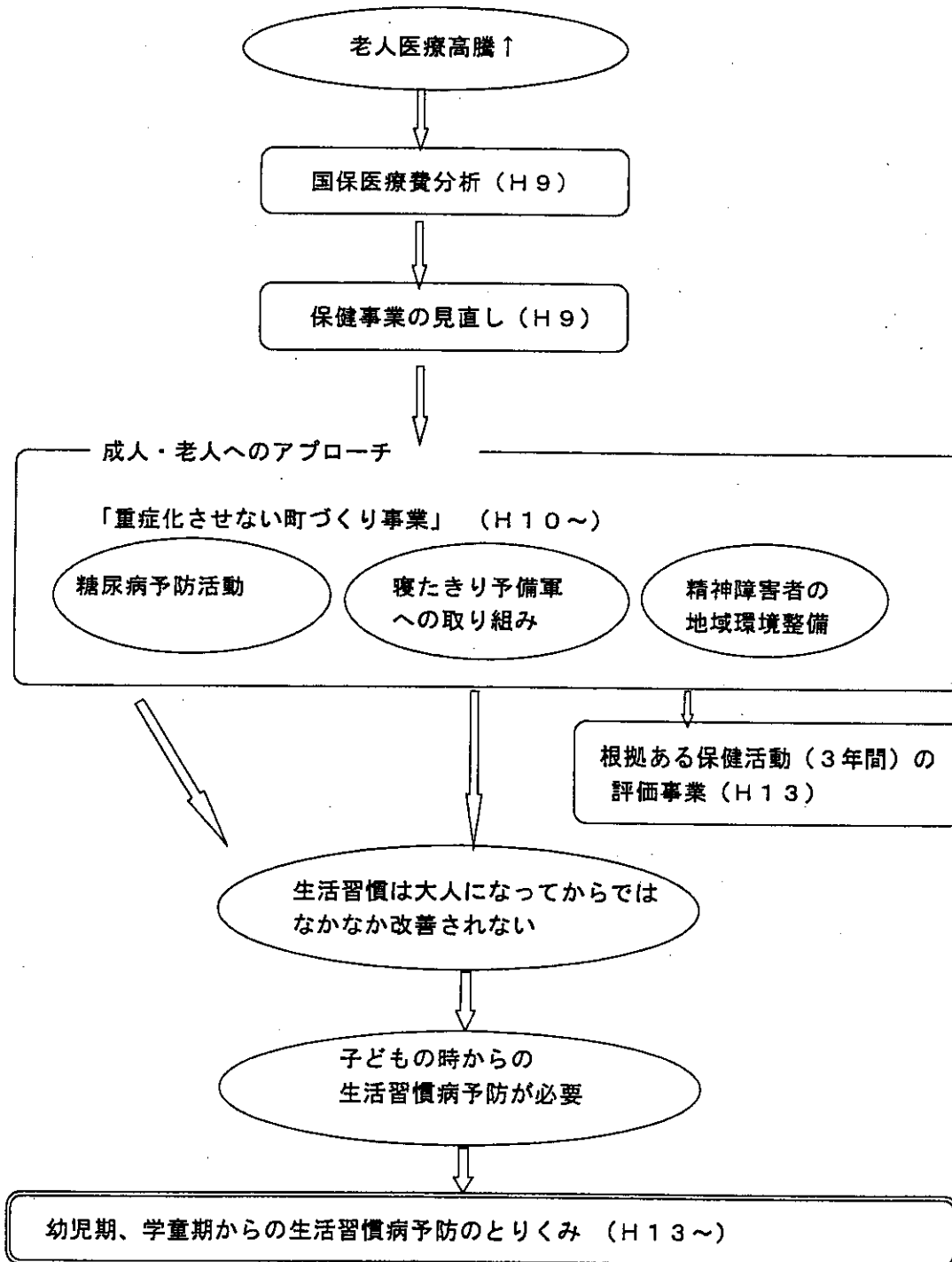
地域健康づくり支援モデル事業 PART1 (子どもの健康づくり)			
多摩小平保健所			
事業区分	継続(開始11年度)	問い合わせ先	生活衛生課 医薬指導係
背景と目的	<p>【背景】健康づくり推進のためには、個人の努力に加えて、それを支援する社会的取組みが必要である。また、健康なまちづくりを推進するためには、地域に定着している組織の活力を生かした体制づくりと情報ネットワークを構築していく必要がある。</p> <p>【目的】①次代を担う「子ども」の健康づくりを地域で考え、取り組むことを目的として、健康に悪影響を与える「たばこ・酒・薬物」の κατηγοリーを題材に、既存組織(家庭・学校・地域・関係機関)が連携を図りながら、ネットワーク化を推進する。(モデル地区:小平市立上水中学校校区---1中学校校区/中(1)・小(4)生徒数2500人)</p> <p>②「子どもの健康づくり」を契機に、健康なまちづくりに向けて課題の検討を行う等の、自主的な取組みへの道づくりを、保健所が拠点となって進めていく。</p>		
事業内容	<p>(平成11年度の目標)</p> <p>(1) 取組課題の決定 (2) モデル地区の決定 (3) 「地域連絡会」組織設置 (4) パンフレットの作成</p>	<p>(平成12年度の目標)</p> <p>(1) 「地域連絡会」の開催 (2) 会報紙の発行 (3) 「地域健康づくりシンポジウム」の開催</p>	<p>(平成13年度の目標)</p> <p>・評価と今後の活動 ・「地域連絡会」の開催</p>
	<p>[平成12年度の事業内容]</p> <p>(1) 「地域連絡会」の開催 (3回開催) ---地域の指導者等を構成員とし、意見交換や解決策を考察しながら、取組の決定と活動の展開を行う。</p> <p>(2) 会報紙の発行 (5回発行) ---情報の共有と2wayコミュニケーションによる一体的活動推進のための「地域連絡会だより」の発行</p> <p>(3) 「地域健康づくりシンポジウム」の開催 ---上水中学校演劇部と地域連絡会メンバーによる「薬物」を題材とした劇及び地域連絡会メンバーによるパネルディスカッション</p> <p>「地域連絡会」構成メンバー 小平市立上水中学校校区の上水中学校・鈴木小・三小・九小・十小の先生とPTA及び青少年対、保護司、地域の薬剤師、民生・児童委員、自治会長、商店会会長、少年輔導員、地域健康づくり推進員、市健康課、保健所(事務局)、その他の有志で構成 &lt;43団体&gt;</p>		
自己評価	<p>「地域健康づくりシンポジウム」では、今年度発足したばかりの上水中学校演劇部を中心に、「地域連絡会」のメンバーも配役に加わり、準備期間の短い中、感動的な劇を演じることができ、「薬物」の恐ろしさを十分伝えることができた。また、運営面においても、広報から当日の運営まで、「地域連絡会」が中心となって円滑に実施することができ、地域が協働することによって産み出されるパワーを感じるとともに、地域で取り組むことの重要性を認識することができた。</p> <p>今後は、この「地域連絡会」での取組が自主的かつ継続的に行われるよう、地域健康づくり推進員の活用などを視野に入れながら、保健所は「地域連絡会」の一構成員として技術的・専門的支援を行っていきけるような体制づくりをめざしていく。また、他のカテゴリーでも同様の地域での取組が行えるよう、今回の取組で得られたノウハウをまとめ、究極の目標であるヘルスプロモーションの実現を図る着実な活動としていく。</p>		

## 7 石川県鶴来町

〈石川県鶴来町〉

幼児期、学童期からの生活習慣病予防のとりくみ

### 1 これまでの経緯



## 2 概要

### (1) 目的

子どもの頃からの望ましい食習慣や自己管理能力を身につけ、成人になってからの生活習慣病を防ぐとともに、食を通じて豊かな心や社会性を養う。

### (2) 実施主体及び役割

実施主体：小学校、保育所（園）

協力機関：鶴来町（技術的支援）、石川中央保健センター（技術的支援）

### (3) 対象

1) 朝日小学校5年生児童（平成13年度～）

2) 保育所（園）児（昭和62年度～）

### (4) 内容

#### 【小学校】

1) おやつをテーマにした食育の実施

2) 「朝日食育つうしん」の発行

授業の内容や子どもの感想などをたよりとし、保護者に啓発する。

3) 食育検討会の開催

学校保健関係者、地域保健担当者へ事業実施報告を行い、次年度に向けての検討を行う。

#### 【保育所（園）】

1) 食育の実施

パネルシアター、絵本の読み聞かせ、調理体験などを通して食事の大切さについて伝えたり、バイキング・セレクト献立によりバランスのよい食事の選び方を体験する。

2) 食育会議の開催

保育士、調理員、栄養士が乳幼児期の食事の重要性や生活習慣病予防について共通認識を持つための会議を定期的に行い、情報交換や研修を行う。

3) 保育者への啓発

食育コーナーの設置、試食会の開催、食事だより「いただきます」の発行を通して保護者への啓発を行う。

## 2. 今後の計画

(1) 学校栄養士と連絡会を開催し、生活習慣病予防についての共通認識を持ち、学校、保育所の児童・生徒や保護者への栄養指導につなげる。

(2) 保育所、幼稚園、小・中学校の保護者や関係者を対象に「幼児期、学童期からの生活習慣病予防」をテーマにした講演会を実施する。

(3) 生活習慣病予防への取り組みが、学校・保育所のカリキュラムの1つとして位置づけられるよう体制づくりを行う。

新しい健康観と地域保健活動のこれから

# 青年期男子の健康づくり 特に農山村地域での健康教育のあり方を中心に

はつゆり

青年の健康づくりへの意識を高めるためにはどのような取り組みをしたらいいのか——このことは、地域保健活動に取り組む者にとって重要な課題の一つです。健康に関する集会やイベントへの青年の参加率の低さに、いつも頭を悩まされているのではないのでしょうか。

今回筆者らは、このような状況に悩む静岡県北遠健康福祉センターから問題提起を受け、青年期にある若者を対象に意識調査を実施しました。その結果、彼らを対象とする健康教育のあり方に若干の方向性を見い出すことができましたので、ここに報告させていただきます。

なお本研究は、筆者ら研究チームに、静岡県

北遠健康福祉センターの林敬所長をはじめとするスタッフの皆さんの協力を得て実施したものです。予防医学を専攻している者の一見解として、地域で健康づくり活動に取り組む皆さんの参考になれば幸いです。

## 地域概況

調査対象とした北遠地域は、静岡県浜松市の北に位置し、天竜川の上流にある山村地域です。この山村で伐採された集材所の中心は天竜市にあります。電力源として有名な佐久間ダムがこの地の北部にあります。産業は、農林関係および公務関係が大半を占め、民家は山間や川沿いに並んでいます。

教育関係者の話では、過疎化はここ一〇年



金森 雅夫

荒木田美香子

松本 友子

かなもり・まさお（浜松医科大学助教授・公衆衛生学教室）／あらかだ・みかこ（浜松医科大学医学部看護学科助教授）／まつもと・ともこ（同学科教授）



表1 男女別の保健行動状況

	喫煙行動		運動習慣		朝食摂取	
	非喫煙	喫煙	あり	なし	毎日食べる	食べない・とんどき飯く
男性 (人)	131	166	99	198	181	116
性別 (%)	44.1	55.9	33.3	66.7	60.9	39.1
女性 (人)	259	46	65	240	234	71
性別 (%)	84.9	15.1	21.3	78.7	76.7	23.3

	間食の習慣		飲酒習慣		自覚的な体格	
	習慣なし	習慣あり	適正飲酒	飲酒回数多い	適正な体格	太りすぎ・痩せすぎ
男性 (人)	138	159	235	62	245	52
性別 (%)	46.5	53.5	79.1	20.9	82.5	17.5
女性 (人)	58	247	290	15	248	57
性別 (%)	19.0	81.0	95.1	4.9	81.3	18.7

	睡眠時間		健康診断の受診状況		健康な生活習慣 (8項目の合計より)	
	適正な睡眠時間 (7~9時間)	睡眠過多・過少	毎年受診	受診せず 不定期受診	あり	なし
男性 (人)	163	134	177	120	166	131
性別 (%)	54.9	45.1	59.6	40.4	55.9	44.1
女性 (人)	180	125	152	153	194	111
性別 (%)	59.0	41.0	49.8	50.2	63.6	36.4

x<sup>2</sup>検定 \*p<0.05 \*\*p<0.01 \*\*\*p<0.001

間ほど落ち着いており、小学校の児童数は一定しているようです。しかし、最近数年間の出生数がゼロ続きの小学校区もあり、将来的には再び過疎が進行することが懸念されています。交通面では、トンネルの開通によって天竜市より浜松市街へ一時間で行くことができます。

### 調査の目的と仮説

生活習慣病の予防は、若い年代から取り組むことが必要です。青年は、高校生までは学校においてなんらかの保健教育・管理を受けていますが、卒業後は大学・職場・家庭などに場が散るために、保健教育を受けることにおいての個人差が大きく、特に農山村では健康教育の機会が得にくいことも考えられます。

そこで、今回の調査では、健康づくりに関する意識や行動について、都市部の青年と農山村部の青年との間に本当に相違があるのかどうかを確認することを目的としました。

### 結果と考察

さらに、青年を対象とした健康教育ストラテジーの構築は急務であることから、その構築のための基礎資料を得ることも目的としました。

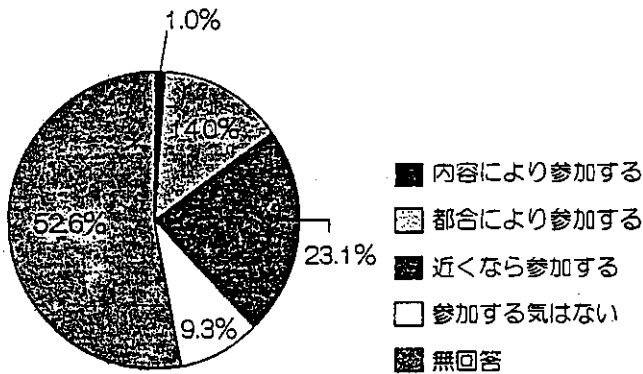
### 対象と方法

静岡県北西部の四市町村に居住する十九歳~二十九歳人口の一〇分の一をランダムサンプリングにて抽出し、留め置きによる自記式アンケート調査を平成十一年一月に実施しました。

#### 1 青年男性の保健行動の特徴

表1に示したように、女性に比べて男性は健康な生活習慣が概してよくありま

図 健康づくりイベントへの参加意思



せん(例外:健康診断の受診状況)。

これは、全国的な傾向でもありますが、今回の調査で、この背景には、家族と青年の関係が影響していることがわかりました。たとえば喫煙の場合、家族内に喫煙者がいるかないかで喫煙率に差がみられ、喫煙者がいると、中学生や高校生から吸い始め、いつしか習慣化されてしまうという状況が明らかになりました。

このことから、青年の健康教育は、現時点での状況だけをみて「このように

行動を改めなさい」と教育しても、効果を期待するのは難しいと言えそうです。

### 2 健康づくりのイベントへの参加意欲

「若者を対象とした健康づくりのイベントが開催されたら参加したいと思いませんか」という問いに対して、「内容により」が「都合がつけば」「近くであれば」参加したいという参加意欲のある者は二三三人(38.1%)で、「参加する気はない」(9.3%)、無回答(52.6%)でした(図)。「どのようなことに関心がありますか(複数回答)」という問いに対しては、音楽(65.3%)、スポーツ(41.7%)、テレビ番組(41.0%)をあげており、音楽の割合が一番高いのが特徴でした。

また、「健康に関する情報源(複数回答)」はテレビをあげた者が多く(80.3%)、ついで親(35.9%)、雑誌・週刊誌(34.6%)、友人(22.0%)でした。対象地域では単身世帯が少ない(約90%が同居)という特性があり、三分の一以上が親を情報源としてあげており、青年への健康教育には、間接的に親の教育に力を入れることも効果をあげる可能性があります。

「参加する気はない」および無回答者は

(以下 Pearsonの  $\chi^2 p < 0.05$  で有意差)、男性が多く(61.2%)、自分の子どもがいない人であり、自分の体型を「やせぎみ・やせずぎ」と感じている人でした。

また、年代を「二十一歳以下」「二十二歳～二十五歳」「二十六歳～二十九歳」の三群に分けた場合、「二十一歳以下」の者に「参加する気はない」傾向がより強くみられました。

市町村が行う中高年対象の健康教育への参加者には、圧倒的に女性が多いという傾向がありますが、この背景には、青年の段階から男性の健康教育への参加意欲が低い現実があることが明らかになりました。

しかし、生活習慣との関連が大きいとされるⅡ型の糖尿病に働き盛りの年代の男性の割合が高いことを考えると、男性に対する青年期からの健康教育の必要性は特に高く、家族を含めたこの対象へのアプローチが大きな課題であると言えます。

### 3 学校での健康教育と現在の健康行動との関連

健康に関する知識一五項目について学校で教わったことがあるかを聞き、現在の健康行動と学校教育での学習度および

表2 過去の学校教育で教わったもの15項目について質問した結果、学校教育で教わらなかったとする項目が4項目以上ある群（非学習群）の特徴

- ①現在の食生活の規則性。「現在朝食を食べない」と答えた者は、非学習群で高い。特に男性に顕著。
- ②現在、健康診断を必ず受けるか否か。非学習群と学習群で差なし。
- ③現在、健康イベントに参加する意志があるか否か。非学習群と学習群で差なし。

は、学校で教わっていないと回答する項目にいくつ〇をつけたかで分布をとった時、分布全体の90%値が4項目に相当したためです。この非学習群は全体の10%であり、回答者のうちで学校での健康教育の効果が最もないと想定される群でした。結果は以下の通りです。「健康診断を必ず受けている」と答えた者は、非学習群で65.3%、学習群62.4%であり、両者に差は認め

記憶との関連を考察しました。現在の保健行動を男女別に、学校で教わっていない項目四つ以上の群（非学習群）と、それ以下の群（学習群）との二群に分け、これを比較したものをまとめたのが表2です。四項目を目安としたのは、学校で教わ

られませんでした。「朝食を食べない」など食事の規則性については、非学習群で30.8%、学習群で19.2%と明らかに前者は食事に規則性がないと言えます。健康イベント参加の意志では、学習群と非学習群の差はなく、その他の項目においても両者の間に差は認められませんでした。

また、同じ質問紙で「学校で教わった」とする肯定的回答の数によって、三分点で分けました。一群は、「学校で教わった」肯定回答八項目以上、二群は三七項目、三群はそれ以下の群です。現在の健康態度、健康行動いずれも三群間で有意差はありませんでした。

以上、非学習群では、朝食を食べないなど食事の規則性が損なわれている率が高い傾向が認められました。このことから、若者の間では学校で教わった教育内容がベースとなり、現在の健康情報入手に熱心に取り組む行動につながっていることが推測されます。

しかし、健康診断の受診率に差がないことや、「学校で教わった」とする肯定的回答数の群間比較によっても同様群間差がないことから、現在の学校の健康教育では、記憶には残っても行動変容には結びついていないことが推測されました。

このような実態から、健康教育や健康イベントの企画においては、子どもたちの記憶に鮮明に残るような工夫が必要であると考えられます。

### 今後の取り組み

今回の調査結果から、青年を対象とした場合、音楽を取り入れた健康イベント企画が少しでも健康意識を高めるために重要であることが示唆されました。また学校時代においても、「このことは学校で教わった」というように強く印象に残るかたちでのイベントや教育が必要ではないかと考えました。

また、農山村では、高齢者や親との同居という特徴を活かせるような家族的アプローチを取り入れることも重要と考えました。特に、親や親族からの健康講話を聞く機会なども重視したプログラムも重要かと思われま

自然との共生やエコロジー、また、親との対話を重視したアメニティのキーワードをどう活かしていくかが筆者らの今後の課題です。

皆さんの教訓を学びながら実践していきたいと思えます。

## 9 高知県

### 連携から生みだせるもの～もぐもぐモーニング事業を実施して～

—平成13年度栄養行政担当者等ブロック研修会（西日本）資料より—

#### ■ 1 「がんばりっ子は朝食から」事業からの流れ

昭和59～61年にかけて「がんばりっ子は朝食から」事業で、朝食の大切さや小児期からの食生活の重要性を県民に啓発した。事業名は県民に浸透したが、いったん事業は完了した。平成8年県民栄養調査結果から、若年者の食生活にさまざまな問題が浮かび上がった。

#### ■ 2 開始の背景や発端

##### ①調査の結果から浮かび上がった若年者の食生活の問題

- ・栄養や食品の摂取は地域性よりも年代による差がみられた。
- ・カルシウム、鉄の不足、脂質エネルギー比30%超 等
- ・20代男性は朝食の欠食率が急増

##### ②「なぜひとりで食べるの」の時代から「なぜいっしょにたべるの」の時代への変化

「どうして朝ごはんを食べなくっちゃいけないの」

##### ③予算獲得の手法

#### ■ 3 取組の目的

- ①小児期からの食習慣が将来の生活習慣病予防につながる
- ②食をとおして、健康や家族の心のふれあいについて考える
- ③民間や団体との連携により効果的な啓発を行う

#### ■ 4 方法と経過

	キャンペーン等 啓発活動	コンクール	民間や団体との連携
10 年 度	<ol style="list-style-type: none"> <li>① シンボルキャラクターとロゴの作成により統一イメージで広報</li> <li>② 広報用ツール（ポスター、リーフレット、ステッカー、）の作成、配布。学校、公共機関はもとより、量販店、書店等店頭において広報</li> <li>③ 入賞作品集の作成（レシピブック、メッセージ集）</li> <li>④ マスコミの活用</li> </ol>	<p>【アイデア朝食メニュー】 応募数：327。審査員長を服部栄養専門学校長服部幸應氏に依頼し、賞決定。</p> <p>【いい朝のメッセージ】 応募数：575</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>① 事業の広報とコンクール募集協力</li> <li>② 朝食使用食品へのステッカー貼付</li> <li>③ 入賞作品集の広報、配布</li> <li>④ 量販店販促チラシに3ヶ月間にわたって順次、入賞作品掲載</li> <li>⑤ レシピカードを店が作成し商品脇に置き客へ情報提供</li> </ol>

11年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 広報用ツールの作成、配布</li> <li>② インターネットHPによる広報</li> <li>③ 10～11年度作品作品から『おはよう。』の作成、配布</li> <li>④ マスコミの活用</li> </ul>	<p>【いい朝のメッセージ】 応募数：1173</p> <p>学校賞の創設</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 事業の広報とコンクール募集協力、入賞作品の紹介</li> <li>② 高知県食生活改善推進協議会が『おはよう。』を6000冊増刷し学校訪問活動、もぐもぐモーニング講座開始</li> <li>③ 量販店プライベートブランドの牛乳パッケージに入賞作品掲載</li> </ul>
12年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 実行委員会による推進</li> <li>② 広報ツールの作成、配布</li> <li>③ インターネットHPによる広報</li> <li>④ マスコミの活用</li> <li>⑤ 保健所で「こどもの食育推進事業」実施</li> </ul>	<p>【いい朝のメッセージ】 応募数：2256件</p> <p>【イメージキャラクターの愛称募集】 応募数：468</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 事業の広報とコンクール募集協力、入賞作品の紹介</li> <li>② 協賛団体からの授賞</li> <li>③ ヘルスメイトの事業として学校訪問活動、もぐもぐモーニング講座が定着</li> </ul>
13年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 実行委員会による推進</li> <li>② 広報ツールの作成、配布</li> <li>③ インターネットHPによる広報</li> <li>④ マスコミの活用</li> <li>⑤ 保健所で、朝食風景からみた「こどもの食育モデル事業」実施</li> <li>⑥ 学校保健連携事業「食生活教室」で普及</li> </ul>	<p>【いい朝のメッセージ】 応募数：979</p> <p>【おいしい絵手紙】 応募数：1053</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 事業の広報とコンクール募集協力、入賞作品の紹介</li> <li>② 郵便局による絵手紙教室の開催</li> <li>③ 協賛店での入賞作品の展示</li> <li>④ ヘルスメイト事業の広がり（料理から朗読、絵手紙まで）</li> </ul>

## ■ 5 得られた成果

① 広報の相乗効果

② 地区組織の相乗効果

③ 食教育の相乗効果

④ 実行委員会の相乗効果

⑤ バリアフリー

## 10 長野県大町保健所

### 「思春期の望まない妊娠・性感染症予防のためのモデルプログラム開発と評価に関するモデル事業」

内野英幸 (長野県大町保健所長)、2001年3月

#### 研究要旨

思春期の若者をターゲットに望まない妊娠・性感染症予防のための地域をベースとした介入研究を行うにあたって、今年度は主として、若者及び若者に関わる機関・関係者などのニーズ・実態調査を行った。また、予防教育プログラムを実施する基盤として、人材育成のための学習会の開催や教材作成、ネットワークづくりに着手した。

#### A 研究目的と方法

若者の望まない妊娠・性感染症予防につながる効果的な介入プログラムの開発・評価の第一段階として、まず、ベースライン調査と支援の為に基盤整備を図った。

##### (1) ニーズ・実態調査

思春期の若者の性の健康を支援する観点から、若者集団やその関係者・機関(学校関係者、保護者、医療関係者)を対象にインタビューと質問紙によるニーズ・実態調査を行った。若者の性の本音を探るグループインタビューとして、A高校の3年生男女8人の自発的参加による座談会を試みた。質問紙調査は、平成12年11月に2高校の生徒、教師を対象に保健所作成の調査用紙(生徒87設問、教師65設問)を配布し、無記名自記式で回答票のみ封筒に密封回収する方法で実施した。データの解析は保健所で行った。

##### (2) ネットワークづくりと支援の基盤整備

地域における性の学習会や思春期の性を考える集い、出前性教育、性に関する情報発信などを企画・実施することによって支援のためのネットワーク・パートナーシップの構築及び人材育成に取り組んだ。また、平成11年6月から保健所が概ね毎月発行してきた若者のための性の情報紙、「生き抜くためのVoice Letter」を冊子に仕上げ性教育の教材として役立てた。

#### B 研究結果

##### (1) 学校現場の実態とニーズ

性教育は、保健全般の授業の一部として位置づけられることが多く、年間カリキュラムの中に時間が割り当てられてはいるが、学年やクラスでまちまちである。学校全体で性に関するトータルな取り組みや理念がなく、担当によって内容も方法はばらつきがある。養護教諭が性教育の授業を任される例もある反面、1年間のうちに強化月間を設定し、外部講師による講演会開催にとどまっている事例もあった。学校としては、性行動に起因する問題は重く受け止めており、重要な学校課題として認識している。

##### (2) 医療現場の実態とニーズ

若者の性行動は都会並みだと思われるが、管内の高校生の人工妊娠中絶や性感染症についての実態はよく分からないとのこと。

医療機関としては、学校からの依頼で講演し、その後生徒から電話での相談を受けることがあるが、電話では十分な対応が困難な場合がある。地域にオープンハウスの施設があれば、ボランティアとして対応することもやぶさかではないとのことであった。

##### (3) 高校生グループのニーズ・実態

座談会形式のグループインタビューでは、男子生徒から、理性で抑えきれない人から、我慢できずについつい性衝動に駆られてしまう人など様々とのコメントがあった。女子生徒からは、「実際その時になってみないと分からない」、「本当にその人が好きならNoとは言えない」、「その場で好きと思えばセックスを優先してしまう」との意見が出された。参加者のセックスの有無で発言内容に較差が見られた。

#### (4) 高等学校と中学校におけるアンケート結果

2 高校の調査対象の生徒639人と教師78人中、回答票回収数は生徒537人(回収率84%)、教師51人(回収率65%)であった。女子生徒が生徒回答者総数の約4分の1を占めた。

##### 1) 高校生の生活と性に関する基礎データ

過去1ヶ月にバイトをした経験が42.3%、携帯電話の保有率が74.4%、喫煙や飲酒の習慣があると答えたものがそれぞれ32.0%、45.9%であった。セックス経験者の割合は、男子27.9%、女子40.0%、直近のセックスでコンドームを使用した者は63.8%であった。妊娠や中絶経験者の割合は全体で4.6%、セックス経験者中12.0%となっていた。

##### 2) 教師の性に関する基礎データ

学校の性教育方針(単一回答)の希望は、「セックスを想定した安全なセックス教育」30.8%、「セックス衝動を理性でコントロールできる教育」26.9%、「人間・人格教育としての性教育」23.1%、「結婚し子供を産み育てる教育」15.4%、「純潔教育」3.8%の順となっていた。「コンドームの正しい使い方」と「コンドームの実物を使い」学校で性教育することに賛成、とそれぞれ78.0%、66.0%が答えていた。

#### C 考察

性に関してはタブーや価値観の多様性、思春期のダイナミックな変化などアプローチが極めて困難な面がある。事実、学校に対するニーズ・実態調査や共通認識作業において種々の障壁や制限に遭遇している。

#### D 結論

いろいろなアプローチによるニーズ調査をしている過程で、地域の閉鎖性から、若者に対して性に関する正しい情報提供や相談 対応が十分に行われていないことを痛感した。今年度の研究を通じて、信頼関係づくりのプロセスの重要性を知ったことが最大の収穫であった。

#### E 今後の計画

来年度以降は、① 予防教育プログラムによる介入グループの選定(高校1年生女子への入学早期の介入が重要と認識)、② 予防介入研究の実施、③ 若者の性を支えるオープンハウスの設立及び企画・運営を課題として研究事業を展開していきたいと考えている。

<メモ>